

# 彩の歳時記

平成二十五年 十一月

落葉 ヴェルレーヌ

秋の日のヴィオロンのためいきの身にしみて  
ひたぶるに うら悲し。  
鐘のおとに胸ふたぎ  
色かへて涙ぐむ  
過ぎし日のおもひでや。  
げにわれはうらぶれて  
こゝかしこさだめなく  
とび散らふ落葉かな。



深まりゆく秋の哀愁を「ヴィオロンのためいき」という美しい言葉で表現した「上田敏」の訳詩集『海潮音(かいちょうおん)』所収のヴェルレーヌの『落葉』は、名訳により、人口に膾炙(かいしゃ)しました。上田敏【1874～1916】は東京築地生まれ。東京大学での師・小泉八雲は「英語を以て自己を表現する事のできる一人中唯一人の日本人学生」と絶賛、北原白秋も「近代詩壇の母はまさしくこの人である」と評しました。ヴィオロンはフランス語で「バイオリン」のことですが、あえて「ヴィオロン」とすることで音楽性を感じます。厳しい寒さに向けての美しい秋の深まりを美しい日本語を口ずさみつつ、過ごしたいものです。

## 十一月の異称

霜月 文字通り、霜が降る月。他に「食物月」の略説、「凋む月」が訛った説も。

## 十一月の暦

二日 **白秋忌** 近代日本を代表する詩人・北原白秋【1885～1942】の忌日。三木露風と共に

「白露時代」を築いた。熊本の南関に生まれ、まもなく福岡県柳川の江戸時代から続く海山物問屋の実家(現存・記念館)に帰る。詩集『邪宗門』『思ひ出』。童謡・唱歌の校歌などを多く残した。「この道」「からたちの花」「城ヶ島の雨」「あわて床屋」など。



三日 **文化の日** 戦前の明治節(明治天皇の誕生日)と1946年に日本国憲法公布、48年の施行日を合わせて国民の休日。皇居では文化勲章の授与式が行われ、前後日に文化庁主催の芸術祭が開催。

酉とりの市(一の酉) 日本各地の大鳥神社で行われている新年を迎える年中行事。浅草長國寺

鷺おとしおとし(神社が最も賑わうのは、江戸時代、吉原遊廓が控えていたことに由来する。

春をまつことのはじめや酉とりの市 宝井其角

## 四日 振替休日

七日 **立冬**【二十四節気】 この日より立春の前日(節分)までが暦上の冬。

十五日 二の酉 神社の熊手御守「かつこめ」は福を「かつこむ」「とりこむ」などの縁起物。

二十二日 **小雪**【二十四節気】 木々の葉は落ち、平地にも初雪が舞い始める頃。

二十三日 **勤労感謝の日** 元は、作物の収穫に感謝する新嘗祭(にいなめさい)。

## 一葉忌

小説家・樋口一葉【1872～1896】の忌日。近代女流作家の嚆矢。代表作「たけくらべ」



の十四段「此年三の酉まで有りて中一日はつぶれしかど前後の上天氣に大鳥神社の賑ひすさまじく此處をかこつけに検査場の門より乱れ入る若人達の勢ひとは、天柱くだけ、地維(ちい)かくるかと思はるゝ。」に当時の酉とりの市の賑わいが描かれている。代表作に「にこりえ」「大晦日」など。たけくらべの舞台、台東区竜泉の「一葉記念館」でイベント開催。

二十七日 三の酉 三の酉まである年は火事多いという俗説がある。

## 十一月の歌 恋人よ 1980年 詞・曲 五輪真弓【1951～】

五輪は女性シンガーソングライターの草分け的存在で和製キャロルキングと言われた。淡谷のり子・美空ひばり・中澤裕子・工藤静香・徳永英明ら多くの歌手によってカバーされた名曲。現在も中国・韓国ベトナムなど東南アジア各国で根強い人気を博している。



枯葉散る夕暮れは  
来る日の寒さをものがたり  
雨に壊れたベンチには  
愛をささやく歌もない  
恋人よ そばにいて  
こころのそばにいてよ  
そしてひとこと この別れ話が  
冗談だよと 笑ってほしい  
二・三番 略

